

# 熾盛 SIJOU

2026/04  
155

真宗大谷派 専龍寺報

みひかりのもと われ今さいわいに このきよき食をうく いただきます  
われいま このきよき食をおわりて こころゆたかに 力みにみつ ごちそうさまでした  
(東本願寺食前と食後の言葉)

Embraced by the Light of the Dharma together in gratitude, we receive this pure meal. Itadakimasu.

Having finished this pure meal, we have been nourished thoroughly both in body and mind. Gochisosama.



降誕会(はなまつり)・初参り式

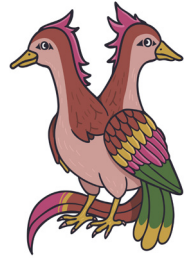
5月6日(水・祝)

13:30 おつとめ 供華供灯 14:00 初参り式

14:15 紙芝とおはなし 15:15 餅菓子まき

【おときは12:00~13:30 時間はご自由に】

# 共命鳥(ぐみょうちょう)



専龍寺まわりの里山には、うぐいすや、たまにはメジロ、スズメ、ヒヨ、キジなどなどカラスやトンビなど鳥の姿や鳴き声を感じられます。

極楽浄土にも鳥がいるようで、『阿弥陀経』には、白い鳥、くじゃく、おうむ、舍利(しゃり・もずや九官鳥)、迦陵頻伽(かりょうびんが・とても美しい声で卵の中からでも鳴く)、共命鳥(ぐみょうちょう)という鳥が説かれています。

共命鳥について、宮城顕先生のお話をお聞きすると、「頭が二つということ、は、思いが二つあるわけでございます。そしてその思いはいつも別々なのでございます。左側の頭が水を飲みに行こうと思うと、右の頭がエサの方に走ろうとする。自分が木の枝に止まろうとすると、右の頭が地面の虫を追いかける。いつも考えることが食い違うものですから、お互いに邪魔されあうわけです。それで、もしこの右側の頭がいなかったら、そうしたら私は自分の思い通りの生き方が出来るはずだ。そうなったらどんなに楽しいだろうと、共命鳥はそう思って、とうとう右側の頭をつつき殺してしまったのですね。

それで右側の頭が死んでガクンとなって、さあこれでこれからは頭は一つ、思いは一つと、自分の思いのままに自由に生きていける。これからはどんなに楽しい生活が出来るだろうと思うわけですが、胴体は一つでございますね。突かれて死んでしまった頭は、次第に腐っていくわけでございます。それはやがて胴体をも腐らせていく。そうしたら、その左側の頭も胴体につながって生きていますから、胴体が腐ってきたら、結局自分自身もいのちを失ってしまう。自由を取り戻そうとして、邪魔になるものを突き殺して、さあこれで……と

たら実は自分自身のいのちを失うことになった。

つまり、つながり。そこに押しえられておりますつながり。それは、そういう一つのいのちを共に生きているのだと、そういうことを教えられてくるわけでございます。」

このお話から、一つにはつながりを忘れて生きているということ。二つには、自分の思い通りにいきることが満足や幸せにはならないということをお聞きされています。

津田の浜も透明度がありますが、岩場には海藻もすくなく小魚もほとんど見られません。漁師さんや海にもぐる方にお聞きしても、昔のようにワカメもとれないし、カラフルな暖かい海の魚もいるとおっしゃいます。

一見きれいなようでも、豊かな山からの水が水田に流れず、栄養分もなく、つながっていたものが断ち切られているのも要因のひとつかもしれません。

環境破壊がいられていますが、大地も海も空気もすべてつながって、生きとし生きるものがすべてつながっています。世界中からの輸入で成り立つ今の生活は、豊かに不自由なく生きようと思うことで、身近なつながりを切ることで成り立っているのかもしれない。

人間関係で悩むのは、意見の違い、思いの違いがあるからです。自分の意見思いがかなう事は、一時的には満足しても、必ずしも生涯満足し、喜びを共にする事とならないように思えます。

現在の日本の人数は、約1億2000万人1936(昭和11)年の人数は、約6900万人だそうです。倍近い人がいるのに、田畑野山の荒れ具合だけを見ても、つながりを捨て生きている現代の結果であるとも思えます。

# 花まつり



[花まつり] 独尊

－かけがえのないこと－

いまから2500年ほど前に、インドの北の方でお釈迦さまはお生まれになりました。それは、花の咲く4月8日の日でした。そのお釈迦さまのご誕生をお祝いするのが「花まつり」です。

お釈迦さまは、お生まれになるとすぐに、天と地を指さして、「天上天下唯我独尊」（天上天下に、ただ我ひとりにして尊し）と声をあげられました。これは、「世界中で一番偉いのは俺だ」といっているわけではありません。他の人と決して代わることのできない、かけがえのないいのちが与えられているということに目覚めたことばなのです。

だれだって、自分自身を大切にしたいと思っています。自分の一生が後悔のないものであることを願っています。しかし、どのようにすればその願いが実現するかは、あまりはっきりしていません。

お金持ちになること。有名になって回

りから注目されること。競争に勝って人の上に立つこと。人の役に立って感謝されること。そのようなことが後悔のない人生に結びつくと思われていることが多いのではないのでしょうか。ところが実際は、思いどおりにならないといって苦しんだり、他の人と比べて自分を情けなく思ったり、しまいにはもう生きていく望みがないといってやけを起こしたりしているのです。

そんな私たちにお釈迦さまは、「あなたは、だれとも比べることのできない尊い存在なのです」と呼びかけてくださっています。この呼びかけが聞こえないかぎり、勝ったか負けたか、得をしたか損をしたか、優れているか劣っているかというものさしだけで自分を計り、一生を過ごしてしまうこととなります。

お釈迦さまのご誕生によって、何が本当に大切なことであるかが、はじめて明らかになったのです。そのお釈迦さまの教えを聞くのが「花まつり」の日です。

（大谷大学 一楽真）

## 初参りについて

本年は、花まつりの日、5月6日に初参り式を行います。ご誕生の赤ちゃんがおられましたらお知らせください。

コロナ感染症対策の時期もあって、年間を通じてお聞きしたときに行っておりましたが、この機会に、まだ初参り式を終えていない小学生も、どうぞお連れそってお参りください。

本山よりのこどもお念珠と、絵本をプレゼントいたします。

保護者のお名前、この名前、年齢をお知らせください。

詳しくはお寺まで、お問い合わせください。

## 石西組同朋婦人のつどい

お寺も家庭も私の聞法道場  
～身近なかかわりの中で～

日時 5月26日(火)

9:30 開会

10:00 法話

12:00 昼食

13:00 レクレーション

13:30 法話

15:00 閉会

会場 極楽寺(益田市川登町720)

会費 1,500円(弁当込)

講師 蓮原耕児さん(福岡県久留米市)

申込 5月18日(月)までに専龍寺まで

## 今月の言葉より

### いただきます

今から20年近く前、『豚がいた教室』という映画がありました。大阪で小学校の先生が児童たちと、食べるという目的で豚を育てていた話をモデルとしてつくられました。

映画の中では、「pちゃん」と名前をつけ飼育し、最期食肉加工場へと車で載せられていきます。その前に、児童たちが意見を言い合う場面が印象に残っています。「食べようといって飼育しているのだから、食べるほうがいい」「他の肉は食べるのにpちゃんだけはおかしい」「下級生にひきつぐ」など意見がぶつかりあいます。

いただきますには、当然生きていた命を奪いいただくこと、育てた方や食肉加工、料理にいたるまでお世話になった人びとの思い苦勞をいただくこと、そして今生きているわたしのいのちをいただくことの3つの意味があると思います。

命はもとよりどれだけの背景があることでしょう。その幾多のことを思えば、口にするまでにしても、どれだけの時間がかかることでしょうか。見えない、感じないふりをして、おろそかに日常すましていると、あらためて自身思います。

短い言葉ですが、食前食後のことばとともに、手を合わせ「いただきます」「ごちそうさまでした」という日常を大事にしたいと感じています。

### 熾盛(しじょう)

熾盛とは、火が燃え盛る様子をいいます。

阿弥陀仏のすがたは光明熾盛とあらわされ、その願いは、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがためと説かれています。

人は、つながりのなか、気づかぬままに、はてしなく罪惡を重ね続け、いまここに生きています。

その存在を悲しみ、慈しみ、寄りそい、ともにあろうとし続けるはたらきを、「阿弥陀」といいます。



専龍寺HP



東本願寺HP

発行日 2026年4月1日

発行者 専龍寺

〒699-3671

島根県益田市津田町561

Tel・fax 0856-27-0020

mail: iwamisenryuji★gmail.com

★は@マーク